

財団大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第3集

大阪府泉佐野市所在

中 嶋 遺 跡 他

3区・8～13区

日根野土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

中世の荘園「九条家領日根荘」の水田跡調査

1995. 11

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

大阪府泉佐野市所在

中 嶋 遺 跡 他

3区・8～13区

日根野土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

中世の荘園「九条家領日根荘」の水田跡調査

1995. 11



調査地上空より空港島、海方向を望む



はるかなる中世、調査地は、「日根野村絵図」に描かれた、開発予定の荒野であったのか、すでに開かれていた古作であったのかどうか。



（西→東）白水池から、質池（左）、十二谷池（右）を望む



（東→西）黒崎窯業跡地上空から空港連絡道路（右上）を望む。（右中央部 JR日根野駅）



飾り金具 (1301-OX出土)



石硯 (1317-OX出土)



1001-OX検出状況



1301-OX検出状況



9区 段丘縁辺部の状況（左：開析谷利用の水田）（北西→南東）



正和5 (1316) 年日根野村繪圖 (宮内庁所藏)

序 文

本書は、JR阪和線日根野駅南東部の駅前再開発のために実施される「日根野土地区画整理事業」に伴うものです。事業地周辺には小塚遺跡、岡口遺跡、中嶋遺跡の所在が知られ、したがって、事業地内では平成3年度から大阪府教育委員会の指導のもと、(財)大阪府埋蔵文化財協会、泉佐野市教育委員会が調査を続けて参りました。協会が調査した全13調査区のうち、3区、8～13区の発掘調査報告書が本書であり、平成7年度の埋蔵文化財調査機関の併合に伴い(財)大阪府文化財調査研究センターが遺物整理事業を引き継ぎ、刊行のはこびとなりました。

当地周辺は、五摂家の一つ、九条家が領有した中世の荘園「日根荘」の村の一つで有名な日根野村の故地です。日根荘は、多くの史料が残され、全国の中世史研究者から注目されてきた存在です。すでに100を超える論考が発表されています。

「九条家文書」には日根荘立荘の鎌倉前期から戦国時代に至る領家の荘園支配関係の文書が揃っています。「政公旅引付」は、戦国時代に守護方や根来勢などに取り崩されつつある領地を下向によって守ろうとした領主九条政基の4年間にわたる滞在日記で、当時の荘園村落の様子を描くものとして有名です。日根野村は以上の史料、また、鎌倉時代後期の「日根野村絵図」が加わるだけに、村の生活や景観がさらによくわかるどころです。そして、これらが現在の景観に今も生きている部分が多く、非常に貴重な地域となっています。日根荘については、空港連絡道路の建設に先立って埋蔵文化財調査とともに、平成元年度から3年間、有形・無形文化財を対象とした日根荘総合調査が大阪府教育委員会、(財)大阪府埋蔵文化財協会によって実施されたこと、また、平成6年度に国の史跡指定を答申された理由が以上にあります。

日根野村は榎井川によって扇状地が段丘化されたところの、上位段丘面上に位置します。したがって、水田としての水が得にくいところですが、荘園領主や領内の集落にとっては、溜池や榎井川の取水を通じて農業用水を如何に広範囲に供給することができるかが大きな問題となっていました。

調査地は、区画整理事業計画以前は水田が続く地帯でした。日根野村絵図は久米多寺が荒野開発を請け負った際に描かれたとされます。絵図中、調査地は中央より少し下、白水池の左にあたります。しかし、調査地は、丁度、段丘の縁辺部周辺にあたるため、はたして、荒野開発の対象になっていた地域なのか、また、古作と記された既に水田化された地域なのであったのか、明確ではありませんでした。加えて、周辺部一帯の開発状況も問題になるどころです。調査範囲は限られ、当面の成果を出すに留まりましたが、しかし、当地での以上の疑問に対しては一応の推論を本書では提示するに至りました。

日根荘の集落部については、机場・日根野遺跡の空港連絡道路にあたる地域で屋敷地が複数区画検出されるなど、一部が明らかにされつつあります。しかし、耕作地については、今回調査で検出された足跡や耕作具痕、水の滲み跡などの明確な痕跡をもった水田跡の調査はありませんでした。したがって、日根荘の耕作地の一つとして景観復原に資する結果になれば幸いです。

調査にあたり、ご協力いただきました地元自治会、関係機関各位に深く感謝いたします。今後とも、当センター事業に一層のご理解、ご援助を賜りますようお願いいたします。

平成7年11月

例 言

1. 本書は、泉佐野市の日根野土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、日根野土地区画整理組合の委託を受けて実施した。
3. 現地での調査は、調査課第1係（係長田中和弘、平成5年4月以降は大野 薫）が担当し、技師井藤暁子があたった。3C区については、技師佐久間貴士が担当した。
4. 調査工期は、以下の通りである。

3区	平成5年1月19日～3月25日
8・9区	平成6年3月29日～8月25日
10～13区	平成6年9月29日～平成7年3月25日

5. 平成7年度の調査機関の統合に伴い、(財)大阪府文化財調査研究センターが整理事業を引き継いだ。整理期間は次の通りである。

図面整理	平成7年4月
遺物整理	平成7年5月～11月

なお、整理事業は、調査部調整課推進係（係長大谷治孝）技師井藤暁子が引き続き担当した。

6. 事業予定地には、当初、『大阪府文化財分布図』による岡口遺跡、小塚遺跡、中嶋遺跡の三遺跡があげられていた。また、平成3年度以降の調査により、白水池の北に新たに遺跡が発見され、白水池北遺跡と名付けられた。さらに白水池堤・池底調査については、白水池遺跡の名称が付されている。しかしながら、調査により遺跡の範囲が拡大するために、本書では遺跡名を呼称せず、調査区単位で記述した。

7. 花粉分析は、川崎地質株式会社関西支社微化石分析所に委託し、渡邊正巳氏の報告を得た。
8. 地理学に対する知見は、和歌山市立博物館学芸員額田雅裕氏に玉稿をいただいた。記して感謝の意を表したい。
9. 調査に際し、泉佐野市教育委員会、土地区画整理事務所、地元自治会をはじめ関係各位のご配慮を得た。

また、調査・報告書作成においては、奈良県立民俗博物館奥野義雄、大阪府教育委員会文化財保護課森屋直樹、泉佐野市教育委員会鈴木陽一、同・中岡 勝、同・大関逸子、堺市教育委員会森村健一、和泉市教育委員会乾 哲也、聖母女学院高校教諭古田 昇、泉佐野市文化財愛護推進委員藤田正篤各氏のご教示を得た。

さらに、水利調査に際しては、旧日根野村氏神野々宮総代大和屋武松氏にご教示頂いた。

以上、記して感謝の意を表したい。

10. 本書の作成・編集は井藤が行った。
11. 調査・整理で作成した資料はすべて当センターで保管している。広く活用されることを望むものである。

凡 例

1. 本書に掲載した地形図・遺構実測図・その他の図に付された北方位は、すべて座標北（国土座標第VI系）を示している。当該地では真北は座標北に対して23分東偏し、磁北は6度40分西偏している。
2. 調査ならびに本書で使用した地区割りは、国土座標系を基に（財）大阪府埋蔵文化財協会が設定したものである。
3. 標高値は、すべて、T.P.（東京湾標準潮位）+の数値を示す。
4. 遺構名称の略記号は、（財）大阪府埋蔵文化財協会の「発掘調査規定」に基づく。また、遺構番号は、調査区単位で種類に関わらず通し番号を与えた。なお、本書で用いた遺構略記号は次の通りである。

OA：道路	OB：建物	OF：柵・塀	OI：水利施設
OO：土坑	OP：柱穴	OS：溝	OW：井戸
OZ：田畑	OC：祭祀	OL：池・沼	OX：その他・不明

5. 出土遺物のうち瓦器については断面図に網掛けし表示した。
6. 本書で使用した土壌の色調表現は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（1994年版）による。
7. 地形図については次の二種類を使用した。

1:10,000 泉佐野市「泉佐野市全図（其1）」1994

1:1,000 （財）大阪府埋蔵文化財協会「日根野遺跡他基本地形図」（昭和36年現在）
1992

巻頭図版目次

図版 1	調査地周辺部景観（1）	調査地上空より空港島、海方向を望む
図版 2	調査地周辺部景観（2）	白水池から、質池（左）、十二谷池（右）を望む 黒崎窯業跡地上空から空港連絡道路（右上）を望む
図版 3	地鎮関係遺構・遺物	
図版 4	中世の水田跡	
図版 5	正和5年日根野村絵図	

本文目次

序文		
例言		
凡例		
第I章	調査の経過と方法	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査の方法	4
第II章	位置と環境	7
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	7
第III章	調査の概要	9
第1節	基本層序	9
第2節	遺構の概要	9
第1項	3区	9
第2項	8区	12
第3項	9区	25
第4項	10区	25
第5項	11区	29
第6項	12区	32
第7項	13区	34
第3節	地鎮土坑状遺構	37
第4節	出土遺物	50
第1項	耕作地出土遺物の性格	50
第2項	各調査区出土遺物	52

第Ⅳ章 中嶋遺跡における花粉分析……………渡邊正巳……………	58
はじめに……………	58
A. 分析試料について……………	58
B. 分析方法および分析結果……………	58
C. 花粉分帯……………	58
D. 層序区分と花粉帯について……………	58
E. 古環境について……………	59
まとめ……………	59
第Ⅴ章 中嶋遺跡の地形環境……………額田雅裕……………	63
はじめに……………	63
第1節 泉佐野平野の地形と遺跡の立地……………	63
第2節 中嶋遺跡付近の地質構造……………	65
第3節 中嶋遺跡付近の地形……………	65
第4節 トレンチ断面と観察の所見……………	66
おわりに……………	68
第Ⅵ章 総括 — 日根荘の景観復原をめざして —……………	69
第1節 調査の成果……………	69
第1項 中世以降の地形と景観の復原……………	69
第2項 土層の堆積状況……………	70
第3項 検出遺構……………	71
第4項 遺物による絶対年代の推定……………	72
第2節 調査地の周辺関係資料……………	73
第1項 周辺部の字名……………	73
第2項 現況の水掛かり調査……………	75
第3節 史料にみる開発事業との対応関係……………	77
第1項 中世……………	77
第2項 近世初頭～前・中期……………	81
第4節 正和5年日根野村絵図との対応関係……………	85
〔参考〕九条家文書・藤田家文書……………	86・87

挿 図 目 次

図1 周辺遺跡分布図……………	2
図2 日根野土地区画整理事業地内遺跡調査区位置図……………	3
図3 調査区国土座標軸割図……………	5
図4 調査区・耕作地名称図……………	6

図5	基本層序図	10
図6	3区遺構平面図	13
図7	3A・3B区 第2遺構面平面図・土層断面図	14
図8	8A区 遺構平面図・土層断面図	17・18
図9	8B区 遺構平面図・土層断面図	19・20
図10	8C区 遺構平面図・土層断面図	21・22
図11	9区 遺構平面図・土層断面図	23・24
図12	10区 第1～4遺構面平面図	27
図13	10区 第5遺構面平面図・土層断面図	28
図14	10区 第1遺構面検出遺構・第4遺構面畝跡断面図	29
図15	10区 地鎮土坑状遺構(1)	30
図16	10区 地鎮土坑状遺構(2)	31
図17	11区 第1遺構面平面図	32
図18	11区 第2遺構面平面図・土層断面図	33
図19	11A区 堅穴状遺構(1101—OX)	34
図20	12A区 第1遺構面・第2遺構面1平面図	35
図21	12区 第2遺構面2・柱穴状遺構	36
図22	13区 第1～6遺構面平面図	38
図23	13区 第7遺構面(水田痕跡群検出状況)平面図・土層断面図	39・40
図24	13区 遺構細部	41
図25	9区・13区 地鎮土坑状遺構(1)	42
図26	13区 地鎮土坑状遺構(2)	43
図27	13区 地鎮土坑状遺構(3)	44
図28	地鎮土坑状遺構検出地点図	47
図29	地鎮土坑状遺構他出土遺物	48
図30	3区・8区・12区 出土遺物	51
図31	9区・10区 出土遺物	53
図32	13区 出土遺物	56
図33	花粉分析試料採取地点	58
図34	花粉ダイアグラム(1)	61
図35	花粉ダイアグラム(2)	62
図36	泉佐野平野・日根荘付近の地形分類図	64
図37	ボーリング柱状図	65
図38	空港連絡道路沿いの地質断面図	65
図39	中嶋遺跡他付近の地形分類図	66
図40	周辺部の字名図	74
図41	正和5(1316)年日根野村絵図	82
図42	日根野における十二谷池の水掛かり範囲	83
図43	宝暦11(1761)年佐野村・日根野村用水争論絵図(部分)	84

挿 表 目 次

表 1	日根野土地区画整理事業地関係遺跡調査一覧表	1
表 2	調査区別土層堆積表	11
表 3	地鎮土坑状遺構一覧表	46
表 4	調査区別・田別遺物登録数一覧表	50
表 5	実測図掲載遺物一覧表	57
表 6	中嶋遺跡における各調査区の層序	67

写真図版目次

図版 1	3区遠景	
図版 2	3区遺構検出状況 (一)	3 B・3 C区垂直写真
図版 3	3区遺構検出状況 (二)	3 A区垂直写真
図版 4	3区遺構検出状況 (三)	土層堆積状況・第1遺構面検出状況
図版 5	3区遺構検出状況 (四)	足跡・耕作具痕跡群
図版 6	3区遺構検出状況 (五)	足跡・耕作具痕跡群、柱穴?
図版 7	3区遺構検出状況 (六)	3 A区溝・3 C区遺構検出状況
図版 8	8区遠景	
図版 9	8区遺構検出状況 (一)	8 A区 田1 第1遺構面・田1・田2 黄褐色土層上面
図版10	8区遺構検出状況 (二)	8 A区 田1 第2遺構面・田2 第2遺構面
図版11	8区遺構検出状況 (三)	8 A区 田2 段状耕作地縁辺部にみられる整地層と水関係施設 8 A区 田3 遺構検出状況
図版12	8区遺構検出状況 (四)	8 B区 田1 第1遺構面・黄褐色土層上面・田2 水入口 8 C区 田3 水入口
図版13	8区遺構検出状況 (五)	8 B区 第1遺構面・黄褐色土層上面
図版14	8区遺構検出状況 (六)	8 B区 田2 耕作地の間に検出された落ち込み・田2 第2遺構面
図版15	8区遺構検出状況 (七)	8 B～C区 第1遺構面・黄褐色土層上面
図版16	8区遺構検出状況 (八)	8 C区 田3 第1遺構面・第2遺構面
図版17	8区遺構検出状況 (九)	8 C区 田2 床土除去面・黄褐色土層除去面
図版18	8区遺構検出状況 (十)	8 C区 田2 黄褐色土層除去面・田3
図版19	9区遠景	
図版20	9区遺構検出状況 (一)	田1 第1遺構面・田2 第1遺構面
図版21	9区遺構検出状況 (二)	田1 第2遺構面・田2 第2遺構面
図版22	9区遺構検出状況 (三)	田1 浅い開析谷の堆積土に開鑿された耕作地・田2 第3遺構面

図版23	9区遺構検出状況(四)	開折谷の堆積土を開発した耕作地に残る足跡・耕作具の痕跡
図版24	9区遺構検出状況(五)	地鎮土坑状遺構検出状況
図版25	10区遠景	
図版26	10区遺構検出状況(一)	第1遺構面・田2 段落部検出状況
図版27	10区遺構検出状況(二)	第2遺構面
図版28	10区遺構検出状況(三)	地鎮土坑状遺構確認状況
図版29	10区遺構検出状況(四)	第3遺構面
図版30	10区遺構検出状況(五)	第4遺構面
図版31	10区遺構検出状況(六)	第5遺構面
図版32	11区遠景	
図版33	11区遺構検出状況(一)	11A区 第1遺構面・包含層除去第2面
図版34	11区遺構検出状況(二)	11A区 第2遺構面・堅穴状遺構
図版35	11区遺構検出状況(三)	11B区 第1遺構面・第2遺構面
図版36	12区遠景	
図版37	12区遺構検出状況(一)	12A区第1遺構面・12B区遺構検出状況
図版38	12区遺構検出状況(二)	12A区第2遺構面
図版39	13区遠景	
図版40	13区遺構検出状況(一)	現代耕作土除去面・田2 第1遺構面 段落部の石積み
図版41	13区遺構検出状況(二)	第2遺構面 耕作地間の水溜め
図版42	13区遺構検出状況(三)	第3遺構面・第4遺構面
図版43	13区遺構検出状況(四)	第5遺構面・第6遺構面
図版44	13区遺構検出状況(五)	開折谷堆積土を開発した耕作地に残る水田痕跡群
図版45	13区遺構検出状況(六)	第6遺構面の水田痕跡群・第7遺構面の水田痕跡群
図版46	13区遺構検出状況(七)	水田痕跡群
図版47	13区遺構検出状況(八)	地鎮土坑状遺構検出状況(1)
図版48	13区遺構検出状況(九)	地鎮土坑状遺構検出状況(2)
図版49	13区遺構検出状況(十)	地鎮土坑状遺構検出状況(3)
図版50	3区・8区出土遺物(一)	
図版51	8区出土遺物(二)	
図版52	9区出土遺物(一)	
図版53	9区出土遺物(二)・10区出土遺物(一)	
図版54	10区出土遺物(二)・12区出土遺物	
図版55	10区出土遺物(三)・13区出土遺物(一)	
図版56	13区出土遺物(二)	
図版57	13区出土遺物(三)	
図版58	13区出土遺物(四)	

第 I 章 調査の経過と方法

第 1 節 調査に至る経過

本調査は、泉佐野市による日根野土地区画整理事業に伴うものである。

事業地は、JR阪和線の関西国際空港への乗換駅である日根野駅の東南側（山手側）に位置する。一帯は、鎌倉時代から戦国時代までの約300年間の長きに亘って存在した五摂家の一つである九条家の荘園として有名な「日根荘」の故地である。

平成3年度に泉佐野市都市政策部、泉佐野市教育委員会、大阪府教育委員会など関係機関が協議し、事業計画地内の区画道路部分の調査を（財）大阪府埋蔵文化財協会が実施することになった。

なお、事業地内での（財）大阪府埋蔵文化財協会における調査は、調査順、地点別に調査区番号が付与されている。今回報告の調査地区は、3区、8区～13区にあたる（図2）。

今回調査を含めた事業地周辺部の調査は、表1のとおりである。

表 1 日根野土地区画整理事業地関係遺跡調査一覧表

調査機関	調査年度	調査区	遺跡名称	
泉佐野市教育委員会	昭和61年度	86-2	岡口遺跡	
	昭和62年度	87-1	岡口遺跡	
		87-2	岡口遺跡	
	昭和63年度	88-1	小塚遺跡	
	平成4年度	92-1	小塚遺跡	
	平成6年度	94-1	白水池遺跡	
	平成7年度	95-1	白水池遺跡	
	95-1	岡口遺跡		
	95-1	中嶋遺跡		
	95-2	中嶋遺跡		
	95-3	中嶋遺跡		
大阪府埋蔵文化財協会	平成3年度	試掘	(42地点での試掘調査)	
	平成4年度	1区	中嶋遺跡	1,116㎡
		2区	中嶋遺跡	
		3区	白水池北遺跡	364
	平成5年度	4区	小塚遺跡	728
		5区	中嶋遺跡	313
		6区	白水池遺跡（北池）	1,540
		7区	白水池遺跡（南池）	2,668
	平成6年度	8区	小塚遺跡	1,018
		9区	岡口遺跡	283
		10区	中嶋遺跡	969
11区		中嶋遺跡		
12区		中嶋遺跡		
13区	岡口遺跡			



泉佐野市位置図

- | | | | | | | | |
|----|-----------------|----|-------------------|----|--------|----|-------|
| 12 | [国宝] 慈眼院多宝塔 | 30 | [重文] 意賀美神社本殿 | 56 | 宮ノ前遺跡 | 69 | 八王子遺跡 |
| | [重文] 慈眼院金堂 | 32 | 植田池遺跡 | 57 | 野々宮遺跡 | 70 | 屯田遺跡 |
| | [府指]天 慈眼院の礎板 | 44 | 長滝遺跡 | 58 | 市堂遺跡 | 71 | 土丸遺跡 |
| 13 | 三軒屋遺跡 | 48 | 中嶋遺跡 | 59 | 北之前遺跡 | 72 | 笹ノ山遺跡 |
| 18 | 鏡塚古墳 | 49 | 岡口遺跡 | 61 | 机場遺跡 | 73 | 土丸南遺跡 |
| 23 | 向井池遺跡 | 50 | 小塚遺跡 | 62 | 標原遺跡 | 74 | 向井山遺跡 |
| 28 | 日根野神社遺跡 | 51 | 十二谷遺跡 | 63 | 向井代遺跡 | 76 | 梨谷遺跡 |
| | [府指]有文 日根神社本殿 | 52 | 丁田遺跡 | 64 | 上之廻牛神 | 77 | 郷之芝遺跡 |
| | 末社比売神社本殿 | 53 | 新池尻遺跡 | 65 | 母山遺跡 | 89 | 北原遺跡 |
| 25 | 日根野遺跡 | 54 | 大坪遺跡 | 66 | 母山近世墓地 | 90 | 上之郷遺跡 |
| 29 | [重文] 総福寺鎮守天満宮本殿 | 55 | [府指]天 北庄可邸くす、いすのき | 67 | 川原遺跡 | 92 | 堰外遺跡 |
| | | | | 68 | 西ノ上遺跡 | | |

図1 周辺遺跡分布図



図2 日根野土地区画整理事業地内遺跡調査区位置図

第2節 調査の方法

第1項 地区割

本書で使用する調査区の地区割の方法は、(財)大阪府埋蔵文化財協会が定めた「発掘調査規程」によっている。遺跡の位置表示には国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI系座標を使用し、X、Yの座標値で示す。

まず、1/2,500地形図(都市計画図)を12等分して500m四方の方形区画を設ける。この区画にはA～Lまでの記号を付ける。次にこの区画を25等分し100mの方形区画をつくり、これは、2桁の数字01～25で示す。最後に100mの方形区画を4mごとに分割、すなわち625等分し、この区画は2文字のアルファベットで表現する。縦方向(Y軸)に25行、横方向(X軸)に25列あり、表示の際にはY軸のアルファベットを優先する。

以上の地区割方法により、今回の調査区は1/2,500の地形図で大C-3-2、3区は500m区画ではB、100m区画では04・09に位置し、8区は同じくC16・C21、9区はC16、10区はB10、11区はB15、12区はB15・B20・C11、13区はC16に位置することになる。これに先の4m区画をアルファベットで表現すれば、全ての遺構、遺物の検出位置が定まる。4m区画は、1/2,500地形図の記号を略し、例えばB09 ICといったり、単にIC区と呼ぶ場合がある。

中嶋遺跡その他の今回調査の地区割(国土座標軸割)は図3に示す。

第2項 調査の方法

事業予定地においては、中嶋・岡口・小塚遺跡の範囲を越えて遺跡は広がりつつある。今後は小さな遺跡単位ではなく大きな範囲で遺跡名称を考慮しなければならない。したがって、遺跡名称よりはむしろ事業地内での調査区単位で概要を述べる。

〈3区〉

調査地は、JR阪和線日根野駅の山手側線路際に隣接し、平成3年度の試掘調査で遺跡が新規に発見された区域である。したがって、「白水池北遺跡」と名付けられた。今回調査地は、幅4mの区画道路に当たり、線路に平行する道路約80m部分と、その北東部にとりつけられた道路のうち東南側の約12m部分である。調査区の字名は「北尻」に属す。

当所は、黒崎窯業の誘致に伴い下請会社の菊竹産業が昭和39年以降に田圃4枚の地上げを行い、寮および社宅を建設した土地である。

3区は、長さ80m部分のほぼ真中に現況の水路が通っている。したがって、便宜上、水路の南西側を3A区、北東側を3B区、L字状に折れ曲がった部分を3C区とし、遺構の検出、遺物の取り上げを行った。

なお、調査地への侵入口がこの3B区北東側にしか設定できなかった関係上、3A・3B区の調査終了後に3C区の調査を行った。

〈8区〉

今回調査の8区は、区画道路の3本分にあたり矩状を呈するため、便宜上、8A区・8B区・8C区の3小区に細分した。現代に関わる表土の機械掘削後、人力掘削については8A区からはじめ、一小区が終了後に隣接小区の調査を継続した。

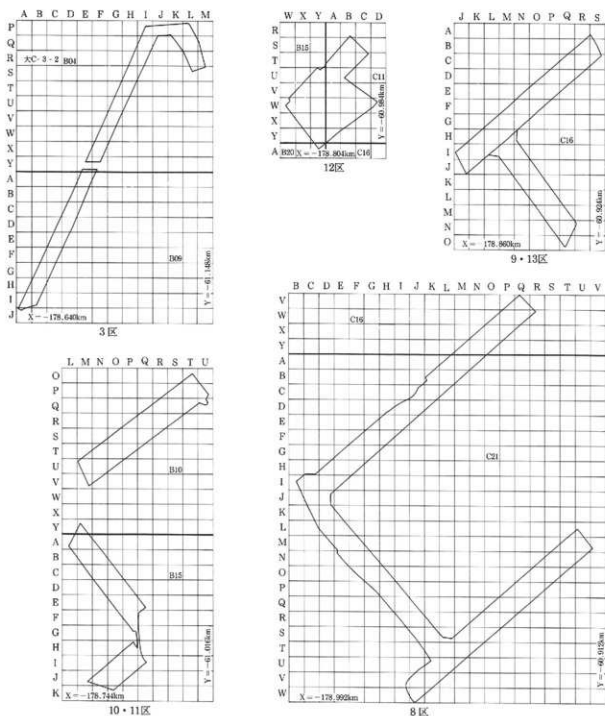


図3 調査区国土座標軸刺図

〈9区〉

9区については区画道路12号線の東側の一部にあたり、また、直線であるため調査区分は行っていない。

〈10区〉

調査地は、一枚の耕作地を横断する道路予定地で、直線の形状を呈している。したがって、調査区分は行わなかった。



図4 調査区・耕作地名称図(数字は地番)

第II章 位置と環境

第1節 地理的環境

調査地は、標高36～39m前後、日根野の集落の北東部にあたり、最近は民家や工場が建設され取り崩されつつあるが、「^{トノ谷池}十二谷池の水掛かり地で、段状に連なった耕作地が広がる地域」である。

地形的には旧堰井川がつくりだした洪積世上位段丘面上にあり、少し離れた東側に熊取との境界をなす丘陵地帯が続く。調査地の西側は、現在でも白水池へと北々西方向に続く開折谷がある。また、既調査成果から、事業地内の東側にも中世以前の同方向に伸びる浅い開折谷があったことがわかっている。

地理的環境については額田雅裕氏の玉稿を頂いた。第V章を参照されたい。

第2節 歴史的環境

(財)大阪府埋蔵文化財協会が平成3年度に実施した中嶋遺跡他試掘調査では、焼土が入った柱穴や溝が検出され、古代の須恵器・軒平瓦や中世の瓦器、青磁が出土している(注1)。今回調査までの成果から、本遺跡は、古代は実態不明であるが本事業地内か隣接地に当時の遺構があり、中心の時代としては中世の遺構の検出が予測される場所である。したがって、古代以降、中世を中心とした周辺部の歴史的状况をみる。

JR阪和線周辺から山手にかけての地域の古代から中世前半頃の遺跡・史跡・建造物などをみる。遺跡としては、飛鳥時代の建物跡がみつかった三軒屋遺跡(長滝)、奈良時代末の井戸と平安時代後期の瓦窯が検出された長滝遺跡・植田池遺跡、7世紀末頃に創建され山田寺式・川原寺式・紀寺式の瓦が出土した禅興寺跡(長滝)、奈良時代末から平安時代初頭の一括遺物が出土した母山遺跡、平安時代の建物跡がみつかった上之郷小学校遺跡、同じく平安時代の建物跡が検出された机場遺跡があり、また、堰井川右岸に広がる条里型水田(長滝・上之郷)は現在も目の前にみることができる。

史跡・建造物・伝承などについては、允恭・桓武天皇の日根野遊樂、衣通媛と茅渟宮跡伝承(上之郷)、延喜式内社(10世紀初頭)には日根神社(日根野)・比賣神社(日根野)・意賀美神社(上之郷)の三社がある。地域の海側に熊野大道(街道)が通じる。また、堰井川の支流には、土丸・大木、そして、大鳴山があり、その地域の古代～中世前半のものとしては、大木に式内社の火走神社、西光寺に平安時代の仏像などがある。しかし、今回調査地の範囲では、古代から中世前半期の歴史を語る直接的な伝承、文献史料などは残念ながら不明である。

中世でも後半、鎌倉時代に至ると豊富な文献史料があり、当地の歴史像は明確にされつつある。すなわち、当地は天福2(1234)年の官宣旨により立荘された九条家の荘園「日根荘」(以下、日根荘は九条家領を指す。近年、嘉祥寺領日根荘の研究も進み出した。)に属する村の一つ、日根野村の内にあり、同村の範囲は江戸時代に俵屋新田村が独立していたことを除き、現代までほとんど変わらなかった。日根荘には、正和5(1316)年に作成されたとされる「日根野村絵図」、および、領主九条政基が1501～1504年に大木に在荘時の日記『政基公旅引付』が残る。当時の荘園村落の景観と政治・社会・生活状況を伺い知ることができる史料として全国の中世史研究者に知られている。

遺跡としては、日根野の字名「大館」、「御館」に近い地域に広がる日根野遺跡で厩を伴う屋敷地を含む集落跡が検出された。机場遺跡でも同様に集落跡が続く。山手の意賀美神社近くの向井代遺跡では鎌倉～室町時代の掘立柱建物が検出された。近世の日根野村や上之郷村はいくつかの集落の集合体である。中世ではどのような集落景観を呈していたのであろうか。

なお、絵図によれば、調査地は耕作地か荒野のどちらかである。中世以降におけるとくに開発の実態が本事業による調査で明確にされたいものである。

注1) (財)大阪府埋蔵文化財協会『第7回泉州の遺跡—平成3年度の調査成果から—』1992

第三章 調査の概要

第1節 基本層序

今回調査区で確認すれば、北端3区、南端8区間の地山面（調査最終段階の遺構面）の高度差はT.P. +34.8m～40.7mと、約6mに及ぶ。水源さえあれば、段落ち部を形成しながら耕作地を連ねることによって水路を通しやすい水田地帯になり得るところである。したがって、周辺部一帯は、中世、日根荘の時代に開発された史料が残るように、全調査区を通じて、盛り土、現代耕作土、現代床土、近世堆積土の下は中世の土層が堆積し、地山面に至っている。中世の堆積土層の厚さは、10cm～50cmである。

全調査区を通じて、表2、図5で基本的な層序関係を整理した。高度が高い地域と低い地域とでは中世上層以下の堆積状況が異なっている。すなわち、上位段丘面上に位置する8区、9区田2、11区、12区と、今回調査で確認された浅い開折谷に位置する9区田1、10区、13区では土層名称他に違いがある。

なお、本書全体を通じ土層の名称は、基本層序1～Ⅹ層で述べるよりも、図5による色調名称で呼称し、層序を示した。

第2節 遺構の概要

第1項 3区

<3A区>

約1mの盛り土を除くと昭和39年に埋没した耕作土があり、さらに床土などを除去すると褐色の遺物包含層がある。これより下の土層（灰黄褐、黄褐、明緑灰、黄色土層など）は地山である。

褐色土層には13世紀後半～14世紀前半の遺物（土師器、瓦器など）が含まれる。ただし、小破片、少量である。この中世遺物包含層の上面と除去面に遺構が検出された。上面を第1遺構面、除去後の遺構検出面を第2遺構面とする（図6・図7）。

第1遺構面では段落ちによって区別される耕作地が2枚、検出された。ただし、区画は現代の耕作地の境界よりは少しだけ南に寄っている。

第2遺構面も同じく耕作地が3枚、検出された。第2遺構面の耕作地は溝で区画される。すなわち、3A区のほぼ中央に東西に横切る方向の312—O S、これにおそらく直交する南北方向の311—O Sが検出された。311—O Sには滞水、ないしは流水の痕跡が見られる。また、第2遺構面の耕作地には鋤などの耕作具、人間の足跡、牛の足跡などの痕跡が検出された。第2遺構面田3の321—O Z・322—O Z・323—O Z・324—O Z・325—O Zはこれらが畝溝に残る痕跡であることが確認できた。

<3B区>

土層堆積状況については3A区と同じで、盛り土の下は、現代耕作土・床土など・中世遺物包含層・地山の順である。遺構の検出面も同じである。

中心部北寄り周辺で中世遺物包含層の堆積が不明瞭な箇所がある。この箇所では第1遺構面に小溝と土坑、第2遺構面では足跡などの痕跡が比較的集中して見られた。

第1遺構面の田3は、段落ちで区別される。第2遺構面の耕作地は3A区のように明確な区画溝は検

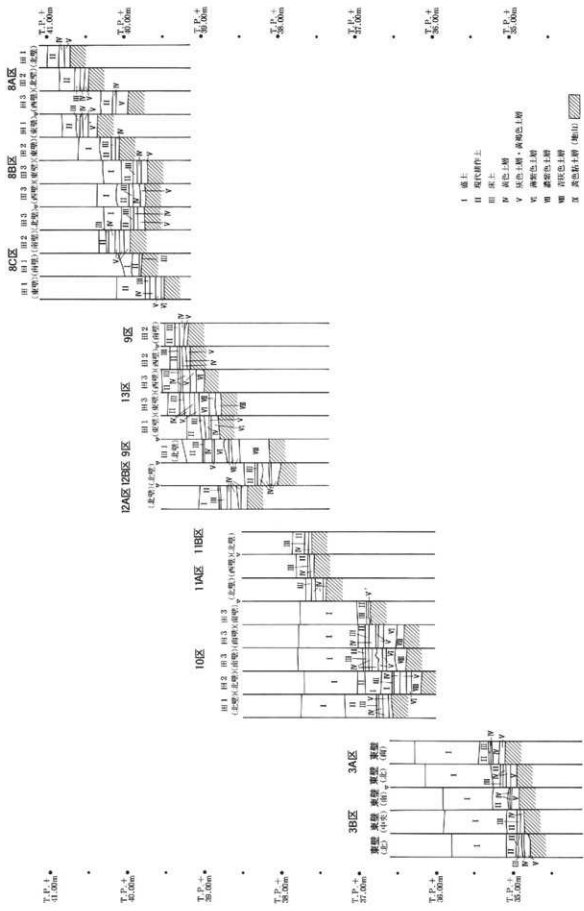


图 5 基本層序图

出されなかった。しかし、3A区同様、田2は東西方向、田3は南北方向、田4は東西方向の足跡などの痕跡が見られた。

なお、3B区の第1遺構面の遺構から出土した遺物は、中世遺物包含層の時期と同じく13～14世紀のものである。ただし、これも小破片、少量のものであった。また、356—O出土品に銚型かと思われるものがあつた。

<3C区>

3C区は3B区の北東端からL字形に東から南に曲がる部分である。基本土層は3A、3Bと同じである。しかし、東側は高度がわずかに高いために、この部分では中世の遺物包含層は削られてしまっている。

3C区には中世の土坑や窪みがある他、南端で近世の溝が2本、検出された。

第2項 8区

調査は、小区または田単位で、黄色土層上面、黄褐色土層上面、黄褐色土層除去面（地山面）での遺構検出を一応の基本とした。出土遺物の検討から、黄褐色土層上面までは近世の遺構面であり、黄褐色土層除去面（地山面）が中世の遺構面となった。

以下、中世での調査状況を中心に述べたい。

A. 道

<8A区>

田1の東側の黄色土層除去面で、畦状の高まりがみられたが明確ではなかった。黄褐色土層除去後に壁面で確認したところ、802—O S、803—O S間にあたるところに黄褐色土層を断ち切る状況で地山の上に別の土が盛りられた状態が確認できた。つまり、両脇が溝の畦道（819—O A）であった。平面的には801—O Sが始まるところで不明となっている。

<8C区>

田3の調査区北西側に続く田は二枚並びとなっている。丁度、この境界に続く位置で8A区田1と同じように黄色土層除去面で地山面を削り残した道（820—O A）が検出できた。幅約130cm、高さ約10cmで北西—南東方向に続いている。

B. 柱穴状遺構

<8C区>

田2の側溝の南壁部分に中世の耕作土で断ち切られた形で柱穴状のピットが2個検出された。東側のものは深さ56cm、掘り方径32cm、径12cm程度のもので、掘り方には植物質のような腐植物がたくさん詰まっていた。西側のものは深さ54cm、掘り方径26cm、径約18cmである。底に灰色に茶褐色の斑状のものが混じる色調の粘土が2cm程詰まっていた。両ピットの芯間の距離は約3.1mである。この距離は柱穴であれば一間の柱間よりも長い距離を示していると思われるので、2個のピットの並び関係は、おそらく対角の関係にあったのかも知れない。しかし、田2の同一面には続きの柱穴は検出できなかった。以上から考えれば、これらピットは、例えていえば、立ち木の根の痕のようなもの可能性があるのではなからうか。

また、同一面（黄褐色土層除去面④）には別に2個のピットが検出された。822—O Pが径23×15cm、深さ11cm、821—O Pが16×19cm、深さ12cmのもので、壁に残った二カ所の柱痕の形状とはかなり

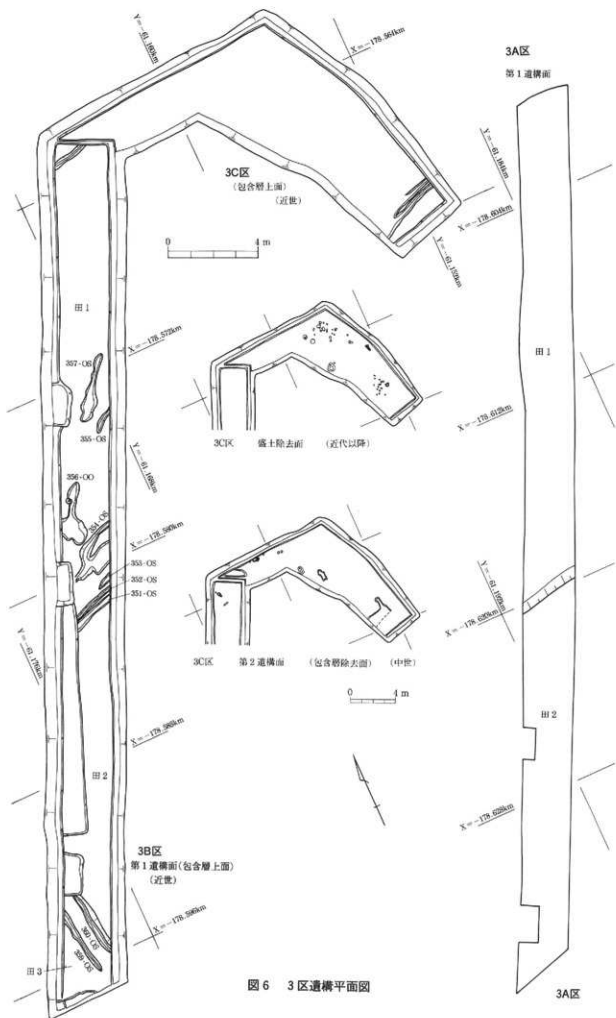
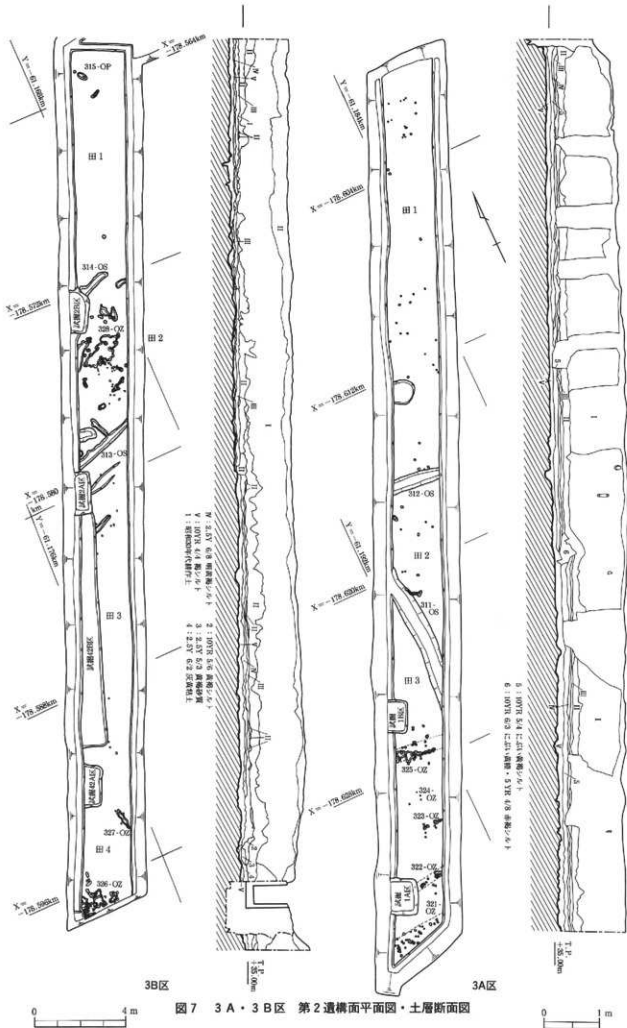


图 6 3区遺構平面图



異なる。9区で検出された銅銭が埋納された地鎮土坑状遺構かと注意深く掘り進めたが、残念ながら遺物は検出できなかった。なお、この面の同一並びに一辺約5cm角の杭が複数個かたまった状態で検出された箇所が二カ所ある(823—O X・824—O X)。当初は同一時期のものかと考えたが、埋土は灰色粘土に黒色斑点が顕著な近世のものであった。

これら柱穴状ピットは、中世の耕作土で断ち切れ、かつ、遺物も検出されない状態で検出されたために、中世の中で耕作土よりも少し古い段階のものであるのか、あるいは中世以前の古代にまで遡るものなのか、などは確認できなかった。

C. 耕作地

各田の地割は、黄色土層除去面までは現況と変化がないのが普通である。古い地割が検出できたのは黄褐色土層除去面での場合が多かった。ただし、耕作地が段違いに落ちる箇所(以下、段落部と呼称)の数については変化は無く、中世以降、その段落部周辺で多少の位置移動がみられただけである。中世以降、連綿と耕作地が続いた状況がうかがわれる。

① 水田面形成のための段落部の形成・整地・畦づくり

<8A区>

現況で東西方向に3枚の耕作地があるが、中世以来、この段並びの状況は変わらなかった。耕作地は東側のものが高く、西へ順に低くなっている。一番西側の田3は字名「こち池」に隣接し、こち池一帯は昔は池であったという伝承が残っている。ただし、池の水掛かり地も池名と同じ場合が多いので断定は出来ない。田3に隣接する耕作地の北北西方向の並びも、一枚ずつ段状に下がっていく。数枚向うが白水池になる。すなわち、調査区が位置する部分は高く、こち池の北北西方向の筋に谷状の落ち込みが続くということになる。これが、いわゆる上位段丘面I・II間の段丘崖で、下位面に生じる旧河道にあたる。

田1と田2の堆積土層は約30cmの高度差がある。畦で堆積層が断ち切れ次の田に同じ堆積が連続する状況が観察できる。つまり、この段の位置は、中世耕作土堆積以降さほどの変化がないものであったことがわかる。田2と田3の段差は現代耕作土下の床土上面で約45cmである。ただし、田3の黄色土層以下は地山となっている。

民家への進入路の下になっていた田2の段を見る。現在は田と道は平坦に続いてしたが、道がつくられる前にはこの部分が田2の縁辺部で段があった。

田2は、中世耕作土を入れる時に田としての水平堆積を保つための整地を行っている。この様子は、西側段の近くで顕著に見られた。畦も地山面段階でつくられる。以後、近世まで段の位置に変化はなかったが、近代以降、畦自体は多少東側に寄っている。反対に畦の西側に土が張り足され、ここに石が積まれる。また、側部がスレートの溝がつくられる。溝はその後、コンクリート製のU字溝となり、最終的に今にみるコンクリート製の用水路となった。これは現況で8B区の南半西側を走る十二谷池から流れる「シミズガワ」の支線の農業用水路である。

<8B区>

現況で南が高く、南側から8A区で呼んだ田2の他、計3枚の耕作地が段並びに続く(8A区田2=8B区田1)。また、現況で8A区から続く水路はすぐに8A区田3に沿って西に曲がり、調査地外に流れる。この水路に沿って現代に建てられた民家への進入路があった。

8A区田2と8B区田2との間の境界線は、時代によって多少の変動が見られるようである。地山面

では両者の間に溝状の落ち込みが見られる。

すでに述べたように 8 A 区田 2 は中世耕作土が入る時に整地がおこなわれ、各種の土が運び込まれている。田 2 の北側、すなわち溝状落ち込みの南側で貼りたし土留めの端杭（壁断面図参照）が残っていた。近世になると、耕作地自体は 1 m 程度南に移動するが、段は中世の時期より約 1.5 m 北に移り、中世の落ち込みの上周辺には取水・排水用の小溝が見られる。この箇所の段の高度差は約 50 cm である。

8 B 区田 2 と田 3 の境界も多少の移動が見られる。地山を断ち切って中世耕作土が入れられたのは 8 C 区の南端から約 5 m 南であり、現代の耕作地境界は、これより 2.5 m、南に後退してしまった。

また、8 B 区田 2 の西側にある段も地山段階のものである。ただし、畦は黄褐色土層堆積以降のものである。

〈8 C 区〉

現況で東側から 3 枚の田が続き、田 1 と田 2 の間に、シミズガワの先の支線よりも上位で取水する水路が流れ、この水路は田 2 の北西部で北流するものと白水池の水込めの一つになるものとに分岐する。後者の白水池への分岐水路は、田 3 の北西縁を流れる。田 1 と田 2 の間は水路のために未調査区間となった。

田 1 は、黄色土層、黄褐色土層がなく、地山面には耕運機のタイヤ痕が付いていた。地形的には元来田 2 より低かったと思われるが、削除の程度は不明である。

田 1 の東側の田は、現在地上げされているが、もとは田 1 より低かった。後述する 9 区の田 1 が田 2 より低くなっていることに対応する。

田 2 は 8 C 区の真中に位置するが、この田だけ上位面の田が張りだしたもので、8 C 区で一番標高の高い田となっている。

田 3 では検出された道と直交し、かつ、現況の段と平行する畦の一部が現れた。田 3 の北畦は、黄色土層でつくられていた。西南角の畦が切れ、水入れ施設（825—O I）があった。田 2・田 3 の段は地山面で約 15 cm、黄色土層の上面で約 40 cm の高低差がある。8 A 区の田 1・田 2 の段同様、中世の時期から続いたものである。

② 旧地割

〈8 A 区〉

田 1 の黄褐色土層除去面には、東西、南北方向に近い方向を軸とする溝が検出できた。801—O S は 4 区で検出された溝に続く。田 1 は、801・802・803—O S を境として、あるいは 807—O S も境として耕作地が区画されていたと思われる。田 1、田 2 間の段も南北方向であることは、この地割軸と関係するようである。

③ 区画溝

〈8 A 区〉

田 1 の一番東側に溝が 2 条検出された。いずれも黄色土層上面より上位から切り込まれる。近代以降のものと思われるが、これが東側の耕作地との境界溝である。

〈8 B 区〉

黄色土層除去面（黄褐色土層上面）で、田 2 の段の下、田 3（8 C 区田 3 と同じ）の面の南端で一条の溝（826—O S）を検出。幅約 70 cm、検出の深さは 6～10 cm。東から西方向に流れ、田に水を送る用水路であるとともに上位の田の落水を集める排水溝でもあったのだろう。